

生存科学研究ニュース

Vol.17. No.1. 2002.1.10 発行

発行 財団法人 生存科学研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1

電話 03-3563-3518 FAX 03-3567-3608

Eメール seizon@mx1.alpha-web.ne.jp

年頭所感

理事長 江見 康一

2002年の年頭にあたり、謹んで皆様に新年のご挨拶を申し上げます。

去る2001年は、21世紀最初の年として前々から明るい展望が期待されていましたが、現実には年初から、暗い、凶悪なニュースが続きました。その中でも、9月11日に米国で起こった同時多発テロは、米ソ冷戦体制終結後の世界の歴史を大きくゆり動かした衝撃的な事件でした。すなわち現代資本主義の本拠である米国の、それもニューヨークの金融活動の中心である世界貿易センタービルが突如破壊されたことの中に、宗教的原理主義による民主主義・資本主義への挑戦、さらには「文明の衝突」ともいえる背景が読み取れるように思われました。このことは、15、16世紀にヨーロッパに発し、米国で開花した現代科学技術文明の成果が、地球上のすべての人々に、ひとしく恩恵として受け取られてい

るのかどうか、という問題にもつながるでしょう。それは、ひっきょう人類の生存秩序のありようについての根元的な問いかけでもあり、私たちの学ぶ生存科学はこれらの問いに答えるべく、その理論的構築が求められていると思います。それに向けての目標はきわめて遠大ですが、2002年はこのような研究関心を高めるための第一歩でありたいと考えています。

暗いニュースがつづく中で、昨年12月1日に敬宮愛子内親王様がお生まれになったことは、日本国民にとって誠に慶賀すべきことでありました。この喜びが日本国民連帯の新たな絆となって、本年は明るい、力強いニュースが次々生まれてくることを心から祈念いたします。



第11回

21世紀世界の文明と生存の研究会

平成13年11月10日（土）午後6時より生存科学研究所会議室において「武見太郎の考えたこと：芸術篇」をテーマに標記研究会を開催した。

概要： 前回に続いて、本研究所の創立者である武見太郎氏を取り上げた。そのさまざまな側面、とくに芸術に関わる側面を、生存科学研究所の理事で研究会のメンバーでもある小島静二氏に報告していただいた。

歯科医である小島氏は、武見氏が日本医師会会長をされていたのと同時期に日本歯科医師会会長をされていた元日本歯科大学学長の中原實氏を、まず取り上げられた。当時、中原氏は保険医問題では武見氏と意見を異にしていた。中原氏は若いころには画家として立つことを考えていた芸術家であったが、歯科大学の運営を継ぐために、その活動を捨てたということである。

一方、武見氏も芸術、とくに絵画には深い理解を示し、若い画家を支援していたということである。そのなかで、亡くなった吉仲太造については知られることは少ない。吉仲太造は「生と死」をテーマとした作品群を産み出すことに生涯をかけた画家であった。

銀座の画廊で小島氏が吉仲太造の回顧展を企画された際に、生存研から多くの方が見にこられていた。それは武見氏のご遺志によったものであったそうで、武見氏が吉仲を高く評価していたことを小島氏は改めて知ったそうである。小島氏は芸術家としての吉仲を紹介

されるとともに、武見氏が医師としてあるいは医師会長としての側面を離れて、芸術を理解する一人の文化人であったことを紹介された。

小島氏は改めて武見、中原、吉仲という3人の名前をキーワードとして、今までとは異なる光のあて方をしてくださった。こうした面も今後の武見太郎の研究につなげていきたいと考えている。（丸井英二）

第17回 銀座ナイトセミナー『生きる』

平成13年12月11日（火）午後6時より、生存科学研究所会議室において三井業際研究所顧問の向山定孝氏を招いて、標記セミナー「90歳の『生きる』」を開催した。

氏は1912年生まれの90歳。本セミナーシリーズの講師としては、最高齢者となる。氏は、企業を中心として技術者として生きてこられたが、その道のりは、先の大戦と終戦直後の荒廃、戦後復興から高度成長、そして今日にいたる日本の歴史とも重なる。戦後の日本を支えた技術者としてご講演いただいた。

氏は、1937年東京大学工学部応用化学科を卒業後、（株）東洋レーヨンに入社された。そして、太平洋戦争時はノモハン事変に参加した後、南方軍航空技術部員として仏領インドシナ、マレー、シンガポール、ビルマ、ニューギニア、フィリピン、台湾と、南方各地を転戦することとなり、戦地においては、一兵卒としてではなく技術者として南洋の資源開拓にあたられた。

戦後は復社して荒廃した会社の復興に尽力

された。戦後の繊維産業の歴史は幾多の変遷をたどり、氏が携わった、セルロースを原料とした天然繊維であるレーヨンが折からの朝鮮戦争特需もあり大いに売れたそうだが、この頃より合成繊維への転換をはかり、Dupon社からナイロンの特許を得て、さらに工夫し生産にこぎつけたという。

氏が関係した仕事の中に、放射線化学がある。放射線利用は、昭和30年代に原子力ブームの中で脚光を浴び、いくつかの研究施設が設立されたが、その頃は工場を中心に原子炉を置き、その放射線を利用することが真剣に議論されていたそうである。しかし事業化されたものは少なく、現在では放射線による滅菌、殺菌技術が主な利用方法として残るのみであるという。

氏はこの間、常に日本の技術の強さと弱さを考え、日本発の技術の進展に尽力されてきた。日本は実際に作業をする人が検討もするという強さがある。一方、独創的発明は出現しにくいという面もあると話された。

近年、技術と社会との関係が問われるなか、1999年には環境中のダイオキシン問題が話題となったが、マスメディアでのダイオキシン分析結果の信頼性に疑問があるものもあったようだ。しかし、社会的、政治的な影響から対策が進んだこと、そして地球環境対策への取り組みが求められるようになったことはよしとされた。

その時代に応じて状況を分析し、目標を定め、その実現に向かって活動をしてきたことを、大きな声で話される氏はとても90歳とは

思えない。「矍鑠」というのはこうした人というのだろう。おそらく氏の若い頃は議論の相手方は大変であったと推察される。

本セミナーは、本年度は若手から中年の研究者を主体として計画していたが、このように元気な老人に出会うと、今後なにかをなす場合は、やはり老人の存在を考えなければ何事もうまくいかないと思わされた。最近の日本の医療制度改革論議は、医療費上昇が最大の要因であるが、老人の存在は大きいとひしひしと感じられた。(津谷喜一郎・金子善博)

第5回21世紀における ハイエングスの構築研究会

平成13年11月16日(金) 午後6時より、生存科学研究所会議室において英国サーレー大学欧州保健医学研究所教授(哲学専攻)のジェフリー・ハント(Geoffrey Hunt)氏を迎え、「クローン、幹細胞と人類の生存：倫理問題」をテーマに研究会を開催した。

ハント氏は、英国の国家保健サービスが雇った初の哲学者であり、現在文部科学省の招聘で香川医大看護学科大学院に滞在中である。

氏は、クローン羊「ドリー」を生んだ英国の研究状況、また、東洋思想を背景にした生命倫理の基本原則などにも言及され、科学研究の現実と哲学的原理の確認を踏まえた、バランスの取れた立場からの提言を示された。

人間のクローンの作成に関しては、特に、体細胞の核移植によるクローン作成について問題にされ、二つのケースを挙げられた。一つは、クローン胚を作成して、そこから胚性

幹細胞を取り出し、再生医療に利用する治療目的のクローン作成である。また一つは、クローン胚を子宮に移植して個体にまで発生させる生殖目的のクローン作成である。

前者では、難病の克服による、苦痛の軽減や医療費の抑制が正当化の理由にあげられ、後者では、不妊症の夫の体細胞核と、妻の未受精卵を利用した「子供」を得ることを同様な理由にあげられている。また、死んだ子供の代わりを得ること、有能な人の複製などの優生学的対応なども議論されている。しかし、体細胞核移植によるクローン作成には、未受精卵内のミトコンドリア遺伝子や突然変異、生育環境、「人格」による相違についての誤解があることを指摘された。

最後に氏は、幹細胞研究推進における産業的利益は理由にならないとし、核移植は、人類の遺伝子プールにとって不安定性をもたらすとし、体細胞核移植によるクローン作成には12年間のモラトリアムを置くことを提言された。この間に、国際的にもクローン作成を非合法とするような国際協定を結ぶ必要性を強調された。特に、クローン作成で生まれた人間への苦痛は、重大で、そのためにも「人間性への罪」を定めて国際法を12年後に定めるべきであるとされた。

講演後の討論では、医療における「患者の権利」などをめぐり議論され、欧米にもさまざまな見解や理解があり、バイオエシックスをめぐる国際的議論の深まりが期待された。

氏のモラトリアムの提言は、英国をはじめ各国が胚性幹細胞の研究に歩みだした現実で

は困難も感じられるが、可能性が残されていないわけではないと考えれば、もっと議論されてもいいことではないかと思われた。

(大林雅之)

武見記念賞贈呈式

公益信託武見記念生存科学研究基金から、平成13年度「武見記念賞」が東京女子医科大学副学長の澤口彰子氏に贈られた。

贈呈式は、福井光壽運営委員長をはじめ基金の関係者列席の下、平成13年12月21日、三井本館（東京都中央区）において行われ、福井委員長から選考経過について説明があった後、賞状・盾・賞金が贈られた。

澤口氏は受賞後、法医病理学における窒息論を中心に、これまでの研究概要を披露し、受賞を励みとして、今後の研究と実践探究への抱負を力強く語り、出席者から盛んな激励を受けた。

研究所日報

- 11月10日（土）21世紀世界の文明と生存の研究會
- 11月16日（金）21世紀におけるバイオエシックスの構築研究会
- 11月30日（金）三役會
- 11月30日（金）常務理事会
- 11月30日（金）中長期基本構想委員会
- 12月11日（火）銀座ナイトセミナー
- 12月21日（金）武見記念賞贈呈式

予 定

- 1月11日（金）三役會
- 1月21日（月）拡大中長期基本構想委員会
- 1月25日（金）常務理事会